

古鈔本宝物集の文章構成とその文体

——最明寺本と書陵部本卷四部分とを中心にして——

菅原 範夫

目次

はじめに

一、最明寺本宝物集の文章構成とその文体

a、文章構成について

b、言語的特徴について

c、第七類本古鈔本の他本について

二、書陵部本宝物集の文章構成とその文体

a、文章構成について

b、言語的特徴について

おわりに

はじめに

宝物集は語り手が嵯峨清涼寺において見聞した仏教信仰勸奨の話を中心にしてまとめ、その中心部分は何人かの聴衆に向けてある人物(僧)が語りかけるという形式を採っている。院政・鎌倉初期のもので講師が聴衆に向けて種々の説話を交えて信仰勸奨する形式の仏教説話集としては法華百座聞書抄が広く知られている。春日和男博士は「侍り」と「候ふ」との用いられ方から法華百座聞書抄は説経と説話との二つによって構成されていることを明かにされた¹⁾。宝物集は法華百座聞書

抄とは様式も異っており、また古鈔本の諸本間においては文体的異りを見せるものもある。本稿は鎌倉時代に書写された諸本においてそれぞれの文章構成と文体的特徴とを見ようとするとするものである。具体的に仏教信仰勸奨の話に入るのは、例えば七巻本の抄出本といわれる身延山久遠寺本⁽²⁾では巻第二以降である。仏教説話集としての存在もこの部分にあるので本稿では専らこの部分について考察を加えていくものである。

一、最明寺本宝物集の文章構成とその文体

a、文章構成について

最明寺本宝物集は巻四部分のみの零本である。一部分を抄出すると次の如くである。

資料 I

①天竺大唐吾朝のことをろく申侍べし、②毗沙離国の仏跡をたづぬれば大林精舎は名をのみきく、③給孤独藺の伽藍をとぶらへば祇洹精舎は礎のみのこれり、④白鷺池は水たえてうえきしげり菩提樹は根をはなれて若葉さゝず、⑤うちかつをもてきみとして摩謁陀国のほかに王なし、⑥まして震旦国は周武王魏武帝会昌天子宗太子徽宗王のためにたびく仏法ほろぼされて諸寺諸山みな荒廢の地となりたり、⑦雙林寺玉泉寺は住侶みな逃散し天台山五台山は門人ことごとくに離山す、⑧咸陽宮は楚項羽にやかれ長安宮は大金国にとられて名所をのくなきがごとし、⑨吾朝のことはみな人のしりたまへることなれば申におよび侍らねども一のせうをいだし侍べし、⑩皇極天皇の新羅國せめにむかひける時備中下つ道の郡に一の里あり、⑪兵をめすに二万人たてまつれり、⑫このゆへに二万郷となづく、⑬そのち吉備大臣真備在國の時二万の人ありしところ□りとてかぞへければわづかに千七百人ぞ侍ける、(略)(五オハ六オ)(文番号、句点、濁点は私に付した。以下同じ。)

資料 I の文を内容的に見る時、幾種類かに分かれる。第⑩文以降は過去の事跡を叙事的に述べている部分であり説話として

扱うのが妥当であろう。それに対して第⑨文まではいわゆる説明のみであり説話としての文章形式⁽³⁾をとっていない。従来の言い方に従い説経と扱うべき部分である。

最明寺本宝物集では「候ふ」を用いていないので法華百座聞書抄の如き端的な言語徴標がなく、また過去の具体的事跡を同様に述べているのではあるが、その叙述形式から説話として扱うものと説経として扱うものとに分かれるのである。⁽⁴⁾更に説経の中を細かく見ると、例えば第①文、第⑨文は具体的に経を説くものではなくして聴衆に対して今から語る内容を告示している部分である。段落の切れ目において次の段落の内容を予告して話全体の中で展開の役目を果しているものである。また次の如きものもある。

資料 II

①こゝをもて南都東大寺禅林の永観律師は人木石にあらずこのめばおのづから発心すとは申たるなり、②はやく道心をおみてすみやかに名利をはなるべきなり、③一念菩提心を発功徳百千の塔をつくるにすぐれたり、④いはんやながく道心をおこして仏道をもとめむ人をや(一才)

右の文例のうち第②文は前の部分の段落を受けて直接に信仰を勧奨している。それはやはり経を説くものではなく聴衆に対して発する語り手自身の考えであり、意図表明の言葉である。巻四全体を通じてこの種の文は多出し、それが右の如く類型的にいくつかの文章構成上の機能を持っていると考えられることから説経の中において区別しておく必要がある。

法華百座聞書抄においても、例えば、

○此品ニ來意、^(釋)尺名、入文件尺、又アマタノ科斷^(段)マシマス。恒例御講ナルニヨリテ、クハシウマウスニアタハス。廿八品、

中ニハ此品スケレタマヘル品ナリ。⁽³⁾ソノ中ニモ「修攝其心」トマウス文ヲ御心ヲト、メヲホシメサハ、ヲノツカラ御功徳ハエサセオハシマシヌヘキコトナリ。(オ311ノ314・実教房)『法華百座聞書抄総索引』小林芳規編による。傍線筆者

の傍線部分の如く相似た部分を見出すことができる。しかし、全体的に経の内容を説明する中にあることは宝物集と異なるも

のである。また、例えば大輔得業の如く「今日ハ勸發品ノ講セラレタマフヘキナリ」(才44)という語り始めを持つ日もあれば、他の日には全くその類の言い方をしないという講者もある。内親王殿下への称讃も経に関連させている如くに認められる。法華百座聞書抄では、次の段落の予告、直接信仰を勧奨することばは一人の講者においても一定して用いているものではなく、またその用い方も経を説く一部分として混在しているのである。この相違点の特徴については後に触れるとして、今は最明寺本宝物集においては説経が二分類され、それは法華百座聞書抄には見られない事象であることを指摘するに止める。

今、これらを「説話」「説経Ⅰ(経を説いている部分)」「説経Ⅱ(語り手自身の意図表明の部分)」と呼べば、説経Ⅱによって段落をまとめ、また展開させて長い内容を段落の積み重ねとして構成していることになり、文章構成のしかたが聞書の法華百座聞書抄とは異なっていることが分る。

それぞれの分量は、説経Ⅰ四六・三パーセント、説経Ⅱ九・一パーセント、説話四四・五パーセントである。法華百座聞書抄が説経四三・二パーセント、説話五六・八パーセントであるのに比して説経の比率が高いことが注目される。

b、言語的特徴について

これら二種三類の文章がどのような言語的特徴を持っているかにつき検討を加える。まず敬語について主なものを見る。

丁寧・謙讓語のうちでは「侍り」が特徴的である。「候ふ」は巻四には一例もなく「侍り」専用である。動詞一〇例、補助動詞五四例を数える。両者合計したうちわけは説経Ⅰ一七例、説経Ⅱ二七例、説話二〇例である。言語量に比して説経Ⅱにおける多用が顕著である。資料Ⅰ・Ⅱにもある如く説経Ⅱは一〇二行程度のもものが多く、全体では三八箇所認められる。そのうち半数以上の二一に用いられているのである。これはすべて聴衆に対する説経者の直接的謙讓表現と考えられる。その用法も「侍めり」10/13(全巻用例一三例中一〇例、以下同じ)、「申侍べし」7/7、「侍なり」3/4と説経の典拠を示したり、次に述べる内容を告示する文に集中していることが分る。説話においては「侍けり」10/14であり、「けり」を基調

とする説話の文体をよく反映している。

次に「申す」についてみる。動詞は説経Ⅰ一七例、説経Ⅱ二一例、説話二三例であり、やはり言語量に対して説経Ⅱにおける多用が注目される。「申侍なり」2/4、「申侍べし」7/7等の「侍り」との共用の他に「少々を申べし(二二オ)」等の「申べし」が7/8と多く、次に述べる内容を告示する場合に集中する。説経Ⅰでは、

○第一に道心をおこして出家遁世して仏道をもとむべしと申はたしかの往生の因なり(二オ)

の如く「申は」が5/7と多く説明文の冒頭における特徴をよく表わしている。説話では「申けり」7/7、終止形5/5と「侍けり」と同様に説話の文体的特徴を見せる。

一方の尊敬表現では「給ふ」について見る。動詞は一例のみであり、補助動詞は説経Ⅰ四五例、説経Ⅱ一八例、説話七二例である。用例数は「侍り」「申す」に比して言語量に比例的であるが、用法には偏りが認められる。説経Ⅰでは「給はず」7/9、終止形16/26と約半数は二種の用法で占められる。これらは過去の事跡等を説明的に述べる場合の特徴である。説経Ⅱでは、

○はやく四馬のたとひをおもひてとく三車にのり給べきなり(一八オ)

の如く、「給べきなり」9/9、「給べし」3/6等聴衆に向けての信仰勸奨部分に専ら用いられている。説話での用法が最も多岐に亘るが、うちで「給けり」が13/14とまとまっております「侍り」「申す」等で見られたと同傾向の偏りを見せている。

係結法においては「こそ」の使用は説経Ⅰ〇例、説経Ⅱ三例、説話一一例、「ぞ」の使用は説経Ⅰ一一例、説経Ⅱ四例、説話二二例である。全般的に「ぞ」の使用が多いのではあるが説経Ⅰにおいて「こそ」の用例がなく「ぞ」の用例が一一例あることは注目される。

助動詞は過去の助動詞において最も顕著な偏りを見せる。「けり」は説経Ⅰ一九例、説経Ⅱ〇例、説話一一七例であり、専ら説話において用いられている。当然のことながら説経Ⅱには用いられていない。「き」においてはこれほどの差はない。

説経Ⅰ三二例、説経Ⅱ三例、説話三九例である。このうち説経Ⅰでは二二例が連体形のものであり、尊者達の過去の事跡を列挙する箇所等に多用されている。

過去の助動詞とは逆に、説経の方の使用数が多いものもある。「なり」は説経Ⅰ六五例、説経Ⅱ三一例、説話七五例である。説経Ⅰでは終止形となる場合に先掲「往生の因なり」の如く「体言＋なり」が24/35、また「連体形＋なり」15/45となっており指定表現に特徴がある。説経Ⅱにおいては終止形で用いられるものうち「連体形＋なり」が18/45である。それはすべて資料Ⅱ第②文の如く「べきなり」であり、聴衆に信仰を勧奨する文体の特徴的な一面を形成している。説話に用いられる終止形のうち8/55は会話中の系図的説明部分に集中して用いられている。

「べし」は説経Ⅰ二四例、説経Ⅱ三五例、説話一九例であり、ここでも説経Ⅱにおける多用が目立っている。その用法は「申侍べし」7/7、「申べし」7/8、「べきなり」18/25であり、特徴は上接・下接語の箇所ですべた如くである。

「めり」は説経Ⅰ五例、説経Ⅱ一二例、説話二一例であるが、説経Ⅱでは一〇例が「侍めり」であり先述の如く特徴的である。

以上主として文末部分における諸特徴を見た。文末部以外にもそれぞれの特徴は見られる。説経Ⅰでは例えば次の如くである。

○心は野馬のごとし、しづめて道心をおこせ、たましひは猿猴ににたり、なづけて仏道を求めよ、煩惱は家のいぬ、うてどもさることなく、菩提は山のかせぎ、つなげどもとゞまりがたし、猪金山をすりかぜ求羅をますがごとくこのみて道心をおこすべきなり(一オ)

比況法、対句法を駆使している様子が見られる。また資料Ⅱ第④文の如く反語法も多出する。一〜二例示す。

○まして大悲心をおこして出家遁世せむもの浄土に往生せむことあたうたがひあらむや(二〇オ)

○極楽に往生する人たれか観音の来迎を(マヤ)はれたるはある(二七ウ)

更に倒置法では、

○おろかなるかなや、菩提の善友におろそかにして煩惱の悪縁にしたしめる、あはれなるかなや、うけがたき人身をうけてあひがたき仏法を修行せざる (四オ)

○たのもしきかなや、阿防羅刹のかたき火の車をぐしてからめとらむとせんとき大聖明王智慧の鍔□ふりてふせぎ給はむとを (三四オ)

等が見られる。これらの修辭的技巧はすべて説経Ⅰにおいて見られ、効果的説経を配慮していたことがよく分る。また、これらは文語的修辭法であることも留意しておくべきであろう。

説経Ⅱでは冒頭部分の表現に類型化している様子が見られる。先掲の資料Ⅱ第②文、また一八オの例文の如く「はやく…べきなり」というものである。全九例を数える。また、

○まことにたれも善にはものうく悪にはすゝめることにてぞ待める (四オ)

の如く「まことに…」の形式のものもある。全四例を数える。いずれも信仰勸奨の部分に用いており、一見単調とも思える繰り返しである。ただこれは単なる繰り返しではなく、度々反復することによる勸奨の効果を意図しているようである。説話部分についても説経の類とは異った特徴を持っている。それは説話の冒頭の形式であって、よく整っている様子が見られる。試みに出現順に挙げてみる。

①皇極天皇の新羅国せめにむかひ給ける時、(五ウ)

②藤原家経が後冷泉院御時の大嘗会の主基の方の歌によめるは、(六オ)

③六条新院(略) これもうちづゞき六七月ばかりにうせさせ給にき (九オ)

④仏たとひをもてをしへてのたまはく (一〇ウ)

⑤善無畏三蔵は摩訶陀国の王なり (一一ウ)

⑥寛□法□は出家遁世して、(二二オ)

⑦顕信の馬入道のつかまつり人出家の後や、ほどへて(二四オ)

⑧仏、祇洹精舎におはしまし、時、(二八オ)

⑨昔、七度還俗したる物ありき、(二九ウ)

以上は前半部分のみであるが、時を告知して説話に入るもの①⑧⑨、中心人物の名前を出して説話に入るもの②③④⑤⑥⑦等いずれも整った説話の冒頭形式を持つものである。このことは後半部分においても同様に認められることである。

以上、顕著に現われた事象について見てきたわけである。二種三類の文章それぞれの特徴はかなり明確になったと考えられる。最明寺本に限っていえば、大きな二つのテーマにつき説経Ⅱを節として内容をまとめて信仰を勧奨し、また展開の予告をして聴衆を導きながら説経Ⅰを組み合せ、具体的事例として説話を挿入するという文章構成をとっているのである。それぞれの文体的特徴も一々言語的に指摘しうるだけの固定性が認められるのである。

c、第七類本古鈔本の他本について

鎌倉時代までに書写された古鈔本は最明寺本の他に同じ第七類本系の光長寺本(巻二)、本能寺本(巻三)の二本と、康頼自筆と言われている書陵部本とが現存する。はじめに述べた如く本稿の扱おうとする部分は説経の場における箇所であり、光長寺本はその範囲に入らないので割愛する。本能寺本は例えば次の如くである。

資料Ⅲ

(一)①第一に愛別離苦と申は別をおしむを申侍るなり、②これも浅きより深く申べき也、③大庾嶺の梅霞にかほり金谷園の桜風にほふ春もくれぬれば別をおしむ人おほく侍るめり、(二ウ)

(二)①人の心如此して一にあらざ、②かるがゆへに十二の門をたて申侍つるなん、③いづれにてもこゝろのひかん方をつとめ給はゞみな仏道にいたるみちなればとく仏になり給ふべし、④能々信をいたしてつとめおこなひたまふべし、(二七オ)

(三)①年ふれど人もはらはぬ庭の面に幾重木の葉の散りつもるらん、②こゝをもて観世音菩薩は一切衆生のねがひをみて窮なる物をあはれみすくはんがために菩薩の行を□おこし給なり、③その因縁をろく／＼申侍るべし、④昔一人の梵士ありき、⑤其名を長那といひき、⑥其妻をまやしら女といふ、(一九オ)

第一例は卷三冒頭であり、第二例と共に説経の部分である。中で、(一)―②、(二)―④は先に説経Ⅱとしたものである。前者は説経の展開を、後者は直接的信仰勧奨をしているものである。第三例では①②と続いた説経の内容を④以下の説話において具体的に述べるための展開告示として③の説経Ⅱを用いているものである。本能寺本では内容との関りから説経Ⅱとしては展開告示に多く用いられているという違いはあるが、文章構成及び文体的特徴は最明寺本と同様であると考えられる。右のことから鎌倉時代までの古鈔本のうち第七類本の特徴については最明寺本で代表させることとする。

二、書陵部本宝物集の文章構成とその文体

a、文章構成について

書陵部本宝物集は説経、説話の所収数が少ないのではあるが、全体的な内容は第七類本と等しく、巻立てはしていないが現存本は第七類本の巻一中途から巻五中途の部分に当る。最明寺本と一致する巻四部分を見ると二つの点において特徴的である。

まず内容から目を向けると後半において第七類本との対応が異なる。前半「第一二道心ヲ発シテ……」は第七類本とはほぼ一致する内容を持ち、説経・説話の両方を持っている。しかるに後半「第二ニ誓願ヲオコシテ……」は第七類本の同箇所とは全く一致せずしかも説話中心となっている。本能寺本(巻三)を見るに第七類本ではこの部分は第五門としているものである。書陵部本は第五門の部分に欠いているが、同様に巻三相当部分を見ると「二ニハ仏ニナムトイフ願ヲオコシ」「五ニハ三宝ニ帰依シ」とあり第七類本とは入れ替わっていることが分る。

特徴点の第二は言語面においてである。まず文意の不明瞭な例が挙げられる。

○(六五四行) 邦心之功德ハ量カタシ、若恒河沙ノカスノ佛ヲツクリテ須弥山ノヤウナル堂ヲ作テスエタテマツリタラム功德ト道心ヲヲコシタラム功德十六分ニ不及ト侍メリ

文脈ではあたかも二つの功德が菩提心の功德に及ばないという如くであるが、「一念発起菩提心勝於造立百千塔」の説明部分としては内容が合わない。

○(六六〇行) 秘密藏經ニハ、菩提心ヨク重之十悪ヲノソク況ヤ第二第三第四ヲヤト侍メレバ

最明寺本に「はじめの菩提心」とある如く「況ヤ」の前提となる語がaの部分にあるべきであるが脱落している。また、

○(八二二行) カタ野ニ御鷹カリ、ヨモイ、テラレテ

の如く動詞に続くべき助詞を持ちながら名詞につづくものもある。他に、

○(八三五行) 御家ノハムシヤウ給ヘルコトヲカタリ申テイワク御アニヲト、男女十一人御アリサマヲ申キ

の如く直接話法の形式の中に間接話法の表現を入れるもの、

○(八八三行) 我一人シテウケムトイウ願ヲ発シタリシカハカルガユヘニ

の如く接続助詞に続けて接続詞を用いているもの等もある。この他、

○(六六七行) 長徳元年之比ノ事ナムトウケタマハルゾアサマシクハムベレ

と係結びが乱れているものもある。ここに見られる文の不整事象の類は、先に小林芳規博士の指摘がある如く、口語的文章の特徴と考えられるものである。最明寺本をはじめとして第七類本の古鈔本では見当らないものであり、書陵部本の性格を見る上で大きな特徴となるものである。

さて、書陵部本も次の如く説経を展開する。

資料IV

(一) (七八一行) ①安元二年ナムドモチカウハアサマシクコ、ロウク侍リシトシゾカシ、②六条新院六月ニウセ給、③高松之院同月、④建春門之院七月、⑤九条之院八月、⑥高人カクウチツ、キカクレヲハシマシタルコトアサマシキコトニ侍ズヤ、⑦メノマヘニ侍シ事ナレバコマカニハ申侍ジ、⑧コノコロノ賀茂神主重保年来建春門院ニマイリツカマツリケルガマイリテミケルニ(略)

(二) (八五六行) ①第二、誓願ヲオコシテ仏ニナルベシト申ハ三世諸佛之正覺ヲナリ給コトハミナ四弘誓願ニヨルナリ、②又佛ニヲノ／＼誓願アリ、(略) 十重毗婆沙論ニハ一切諸佛ハ願ヲハナレテ生セズトハ侍ルゾカシ、④誓願カナラズ成熟ス、⑤スミヤカニ天上之位ニ登リテ十方之衆生ヲミチビカムトイフ誓願ヲヲコシ給ベキナリ、⑥昔シ波羅國ノ皇子アリキ、⑦名ヲバ大施太子ト申キ、

第(一)例では①の説経Ⅱに導かれて②～⑥の説経Ⅰ(先人の事跡の列挙)が続き、説経Ⅱ⑦によってまとめられる。更に⑧から説話が続くという構成である。第(二)例は卷四相当部分後半の冒頭であるが、説経Ⅰ①～④に続いて説経Ⅱ⑤で信仰を勧奨し、⑥より説話が始まるという構成である。前半・後半ともに最明寺本と同様に二種三類の文章が認められる。それぞれの割合は説経Ⅰ五二・三パーセント、説経Ⅱ六・六パーセント、説話四一・六パーセントである。ただ、前半では説話は三〇・一パーセントしかなく説経が中心を占め後半では逆に説経が二八・一パーセントと説話を中心を占めている。最明寺本と比較しては説経Ⅱの割合がやや少く、八箇所しか用いられていない。

b、言語的特徴について

それぞれが言語的にどのような特徴を持っているかについて最明寺本と比較しながら見ていく。

まず、「侍り」は説経Ⅰ二四例(用例は動詞を含む。以下同じ)、説経Ⅱ九例、説話四例である。説経Ⅰでは「侍り」8／8、「侍べし」3／3、「侍り」4／7等が目目される。説経Ⅱでは「侍り」3／7、説話では「侍り」2／3等が複数用いられているものである。「侍り」「侍べし」は最明寺本では説経Ⅱに集中していたものでありこの点大きく異なる。なぜこ

のような異りが見られるのであろうか。書陵部本では例えば説経Ⅰの中で、

○(六三五行) 禅林寺ノ永観ハ、ヒト木石ニアラズ(略)トゾヲシヘテ侍メル、コノムテモノヲコスベキハ道心也、

○(六三九行) 一念發起并心勝於造立百千塔ト申テ侍メラバ道心ヲオコシタラム功德ハカリナク侍ベシ、タトヘバ善見葉王ノ(略)

の如く典拠のある文言等を述べる時に用いている。これらの箇所は最明寺本では次の如くである。まず後者については、

○一念菩提心を発功德百千の塔をつくるにすぐれたり、(略) 仏華嚴経の中におほくの喩をもて菩提心の功德をばほめ給て侍めり、たとへば善見葉王の(略)(二オ)

書陵部本は単に文言を引用して説経に典拠を与えるのみであるが、最明寺本では文言引用の後にそれを解説する部分がありそれに続けて別に典拠と例示に移る旨の告示をしているのである。従って「侍めり」の用法は同じであっても書陵部本は説経Ⅰに含まれ、最明寺本はそれを析出して説経Ⅱとしているのである。

前者の例に対応する部分には「侍めり」は用いていない。

○南都東大寺禅林の永観律師は人木石にあらず(略)とは申たるなり、はやく道心をこのみてすみやかに名利をはなるべきなり、(一ウ)

注目されるのは永観律師云々の次の文である。書陵部本は経を説く形で述べるのであるが、最明寺本は信仰の勧奨の形をとる。両本の間の説経部分の特性がこれらの例に顕著に現れている。最明寺本では説経Ⅱによる信仰の勧奨の繰り返し、また展開の告示の繰り返しによって多種の説経Ⅰ、説話の節目を成しているのであるが、書陵部本ではそれらは説経Ⅰに含まれる場合も多いのである。

○(六八九行) 出家シタル功德各申侍バ波羅門酒ニ酔テ(略)

等もその好例である。「侍べし」も同様である。書陵部本は、一応説経Ⅱという文章を持ってはいるものの、一方では最明

寺本で説経Ⅱとしてゐる箇所を説経Ⅰに含んでゐる。それは先述した法華百座聞書抄と通じるものである。前掲例の如く接続表現となつて後続文に含まれていくものもあり、口語的側面も看過できないところである。

係結びは説経Ⅰに「コン」五例、「ゾ」六例、説経Ⅱには各一例、説話には「コン」二例、「ゾ」一例（歌）のみである。いずれの係結びも説経Ⅰに集中しており、最明寺本と異つて係結びを多用する強調表現がよく看取されるところである。

文末部以外の諸特徴に目を向けると、例えば説経Ⅰでは、

○（六三行）**栲**ハ家之犬ウチサルコトナシ、**并**ハ山ノカセギツナゲドモトゞマリガタシ、コ、ロハ野馬ノゴトシ、ゝヅメテ道心ヲ発ベシ、猿猴ノゴトシ、ナツケテ佛道ヲモトムベシ、

とあり、先引の最明寺本の同箇所と比較してみても、対句法としても不完全なものになつてゐる。また「況ヤ第二第三第四ヲヤ」等は見られるが、他に反語・倒置法等はほとんど用いられることがなく平板な調子である。

説経Ⅱでは、

○（六三行）ハヤクコノオモヒヲナシテ道心ヲ発スベシ

の如く「ハヤク」「スミヤカニ」を用いるものが三例ある。説話では人物名で始まるもの六話、「昔シ」で始まるもの一例と一応の冒頭の形式はそなへてゐることが見られる。最明寺本と比較すると説経Ⅰにおける相違が目立つのである。この特徴を考へてみるに、先述した如く書陵部本の本文が聞き書きの特徴を持つてゐることと関係すると考へられる。最明寺本の如く文語的修辭法をもつてすれば、文章が複雑になりすぎ却つて真意の伝達を難しくする恐れがある。さすれば、平板な文章で真意のよく伝達されるものが、より適切と考へられるのである。文の不整とした事象を持つ文章的性格は他の文体にも関わつてゐるのである。

書陵部本が持つ文の不整事象等の口頭語的性格と、説経Ⅱの存立状況が不明確で法華百座聞書抄と同様であることは、同趣の特徴である。ただしそのことと説話の冒頭が整つてゐることとは中山法華経寺本三教指帰注にも見られる如く相容れ

ないことではない。

卷四相当部分以外においても説経Ⅰと説話とを中心にして、時折、

○(四八一行) モロコシニモカヤノコト侍ナムメリ^(A)

○(六一七行) コノ十二種之中ニイツレニテモコ、ロノヒカムカタヲツトメ給ベシ

(以上卷三相当部分)

等、説経Ⅱを用いるという文章が用いられている。また言語的諸特徴も同様である。

おわりに

以上、最明寺本宝物集と書陵部本宝物集卷四部分との双方において、文章構成と文体とについて見た。最明寺本では二種類の文章が認められ、特に類型的とも見られる説経Ⅱの働きが顕著であった。文体もそれぞれに特徴が見られ、説経Ⅰの文語的修辭法が目立った。一方、書陵部本では文章構成については二種三類のものが認められた。しかし、説経Ⅱとした文章が一応は認められるものの、内容的に説経Ⅱとなつて然るべきものが説経Ⅰの中にある場合が少からず認められた。それは、法華百座聞書抄におけると同様の文章であり、口語的言語事象と共に聞書性格の現れであると考えられたのである。

口語的言語事象のうち文の不整とした六五四行・六六〇行・八三五行等は、文の一致不一致の具合からして例えば最明寺本の如き文語文に基づいたと考えざるを得ないものがある。

第七類本の成立については、小泉弘氏は一一九〇年代には成立していたであろうとしておられる⁽⁸⁾。書陵部本も、鎌倉初期に書写されたと推定されている⁽⁹⁾。成立も書写に近い時期とすれば、両本とも相接して成立したことも考えられる。ともあれ、言語的事象を中心に考えてみれば、一卷本は最明寺本の如き本文を持つ第七類本の文語本文に基づいて説経したものを⁽¹⁰⁾聞書したものと⁽¹⁰⁾考えられる一面を持つのである。

注

- (1) 『古鈔本宝物集』(角川書店) 所収写真による。
- (2) 「侍り」と「候フ」の分布より見た「法華百座聞書抄」の文体」(『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』) 所収)
- (3) 説話の要件としては、文中に会話を持っていること、叙事的に記述がなされていること等を考えたことがある。本稿もそれに従った。拙稿「中山法華経寺本三教指帰注の注釈の諸形式」(『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』築島裕・小林芳規編、武蔵野書院、所収) 参照。
- (4) 二六オ―二六ウに「延暦寺は九条右丞相の建立なり、□大師の□立にあらす、しかりといへともこのこと仲胤か説法の□にしるせり、定て存旨あらん」の文が一段下げて書かれている。書式からしても他の箇所本文とは異なるのでしばらく考察の対象外とする。また書式からいえば二八オからの「あなうの観音」、四二オからの「白鷗の恩を報せんと思はゞ云々」の二説話が同様に一段下げて書かれている。
- (5) 「宝物集解説」(『古典文庫第二八三冊、』宝物集中世古写本』) 所収、昭46・1) の分類に従う。
- (6) 「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要、特輯号3 昭46・3)』
「中山法華経寺本三教指帰注の文章と用語」(『国文学攷』72・73合併号 昭51・12)』
「国語史料として見た中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究」(『中山法華経寺本三教指帰注総索引及び研究』築島裕・小林芳規編、武蔵野書院、所収) 等
- (7) 後世のものではあるが天草版伊曾保物語の文体について指摘されている。
- (8) 酒井憲二「天草本伊曾保物語の文章」(『日本大学文学部研究年報七輯 昭32・3)』
注(5) 文献
- (9) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要、特輯号3、昭46・3)』
- (10) 山内洋一郎氏は聞き書き的文章を用いて書いた可能性も一考する必要があるとされる。
- 〔附記〕 本稿は第四回(昭54・8・12)、第五回(昭55・8・12) 鎌倉時代語研究会における口頭発表に基づいている。小林芳規先生には席上また稿後種々御教示いただき、山内洋一郎氏をはじめ研究会の方々に席上多くの御助言をいただいた。厚くお礼申し上げます。